NOBORITO1945 ―登戸研究所 70 年前の真実―
第二期　8 月 15 日以降の登戸研究所
―戦後の登戸研究所と所員たち―

資料館館長　山田　朗

はじめに

〔1〕70 年前＝1945 年 8 月 15 日以降における登戸研究所での証拠隠滅作業

〔2〕所員たちの戦後

公職追放、起業、米軍（GPSO）への参加、米軍〈秘密戦〉への協力

Ⅰ　敗戦にともなう証拠隠滅作業

１　証拠隠滅作業

〔1〕1945 年 8 月 15 日午前中に陸軍省軍事課から「登戸」「ふ号」関係の証拠隠滅命令が出る

〔2〕疎開先（伊那）でも書類の焼却、器物の破壊が徹底して行われる

→　全国の軍事施設で共通の作業

→　膨大な戦争関係資料の消滅（主に降伏受諾から連合国上陸までの 2 週間で）

〔3〕例外：中澤第 3 分工場（福岡社）からの「謀略放火機材」の流出

２　証拠隠滅にともなう事故・不始末

〔1〕毒入りチョコレート誤食事件（伊那）

伊那村分工場（伊那村国民学校）で毒入りチョコを動員学徒に誤って与える

→　胃洗浄などの措置で犠牲者は出ず

→　〈本土決戦〉用の攪乱兵器として毒入りチョコを製造していた

→　他の軍事施設でもニトログリセリンの誤食・暴発事件などが起きる

〔2〕偽札燃え残り（登戸）

連絡機関と第三科が残っていた登戸でも証拠隠滅作業

→　器物破壊のため（？）に戦車も使用

→　偽札製造のための印刷機（破壊？、払い下げ？）

残った偽札を焼却

→　灰を多摩川に遺棄するも、燃え残りが河岸に漂着

→　集めて相模湾に流しにいった

残った製紙原料や偽札の切れ端　→　地元業者（山田紙業）に払い下げ

Ⅱ　登戸研究所の所員たちの戦後

１　所員・雇員たちの復員

〔1〕証拠隠滅作業の後、8 月のうちに解散式（伊那）

→　残務整理者以外の所員・雇員（出征者含む）は復員

〔2〕米軍による登戸研究所施設の接収（10 月～）

→　ＧＨＱ参謀 2 部による所員の尋問

→　情報提供と引換えに免責措置がとられたといわれている（戦犯として起訴された者なし）

〔3〕登戸研究所関係者のおかれた立場

研究所所員（技術将校・技師・技手）は、1946 年 1 月の**公職追放令**で公職にはつけず

→　起業、一般企業・家業に復帰あるいは就職、帰農など

雇員・工員には退職一時金が支給され、解雇・帰郷

２　起業した事例（伴繁雄氏の場合）

〔1〕伊那村分工場工場長・伴繁雄（元技術少佐）

地元に残り、元所員らと「上伊那農村工業研究所」を設立

〔2〕登戸研究所の技術と地元の資源を活かした製品の開発
例：パーマネントキャンドル（戦後の電力不足に対応）
ベントナイトクレンザー（地元の白土を利用した製品）

３　関連企業に就職した事例

〔1〕電波兵器関係者（北安分室）
北安曇郡池田町に移転していた「日本高周波株式会社」に就職
〔2〕元第一科長・草場季喜（元陸軍少将）ら役員に
〔3〕電波兵器技術の平和利用
例：高周波による木材乾燥・接着・屈曲
金属焼き入れ、塩化ビニールの接着　など

４　登戸研究所関係の軍事技術のその後

〔1〕「く号」：怪力光線・怪力電波
→　電子レンジ・魚群探知器などの技術のもとに（→レーザー兵器として実用化）
〔2〕和紙の機械漉き技術（戦時中に研究・試作）
→　懸垂短網自動抄紙機などとして実用化
〔3〕「マルケ」（ね号）：熱線（赤外線）誘導式の爆弾
→　銃砲の自動照準装置、ミサイルの誘導技術として実用化
〔4〕偽札・偽パスポート
→　米軍による〈秘密戦〉遂行の道具として活用される

５　米軍ＧＰＳＯ（政府印刷補給所）での活動

〔1〕1950年春（朝鮮戦争直前）
→　元第三科長・山本憲蔵（元主計大佐）から元三科員数名に連絡
〔2〕ＧＰＳＯ（Government Printing Supplies Office）
→　米軍横須賀基地内にあった野戦研究班（ＦＲＵ）の下部機関
→　対共産圏〈秘密戦〉のための資材を供給する組織
→　山本憲蔵をチーフに元三科員10名ほどで構成
〔3〕1952年6月、山本は新拠点設置準備のためにサンフランシスコへ
→　後任のチーフに伴繁雄（秘密インク・写真などの高度な知識）を推薦
→　1952年4月より、伴は横須賀に勤務（契約期間10年）
→　ＧＰＳＯは30人ほどの規模に（第二科・第三科関係者が中心）
〔4〕1961年、ＧＰＳＯはサンフランシスコへ移転
→　それまで2年交代で横須賀とサンフランシスコで勤務
→　中国・北朝鮮・ソ連のパスポート・証明書類の偽造
→　1961年以降はベトナムの偽造紙幣の製造も行われたとされる

おわりに

〔1〕戦争・〈秘密戦〉の記憶を残し、戦後との連続性を検討する必要性
〔2〕明治大学中野・生田キャンパスで戦争を語り継ぐ意義

【参考文献】

〔1〕伴繁雄『陸軍登戸研究所の真実』（芙蓉書房出版、2001年、新装版2010年）
〔2〕海野福寿ほか編『陸軍登戸研究所―隠蔽された謀略秘密兵器開発―』（青木書店、2003年）
〔3〕渡辺賢二『陸軍登戸研究所と謀略戦』（吉川弘文館、2012年）
〔4〕山田朗・明治大学平和教育登戸研究所資料館編『陸軍登戸研究所〈秘密戦〉の世界』（明治大学出版会、2012年）